桜御門復元

歴史的建造物の復元

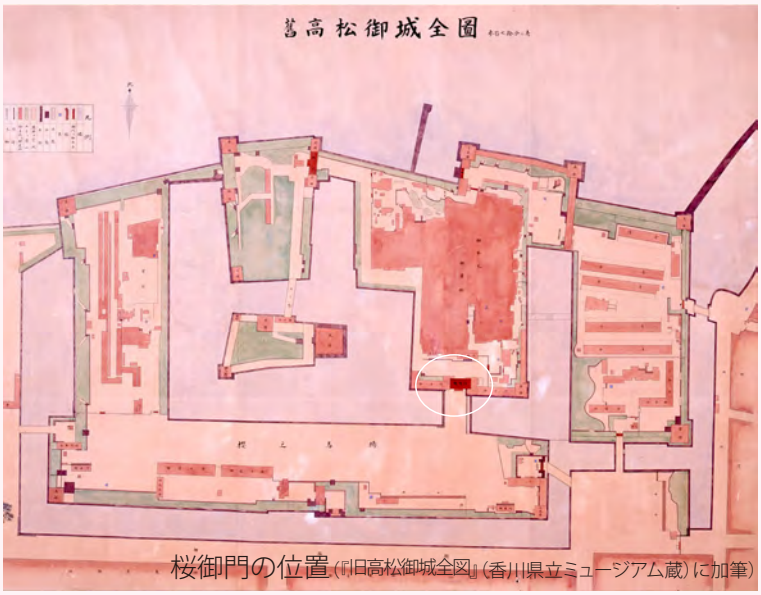
復元した桜御門（上）、基本設計時の復元完成イメージ図（左下）、古写真（右下、奈良文化財研究所提供）

桜御門の概要

桜御門の位置と桜の幔幕

桜御門は、桜の馬場と三の丸を画する位置に築かれました。江戸時代前期の高松城下を描いた『高松城下図屏風』に既に瓦葺の櫓門が描かれており、築城後早い段階で整備されていた門であることが分かります。

門には、藩主の在城時や折々の節句に合わせて桜の文様をはじめとする3種類の幔幕が懸け替えられていたことが『小神野筆帖』等の文献資料に記されています。今回幔幕を復元製作しました。



桜御門の位置（『旧高松御城全図』（香川県立ミュージアム蔵）に加筆）

国宝指定の内定と高松空襲による焼失

天守をはじめとする建造物の多くは明治に入ってから破却されましたが、桜御門は月見櫓や艮櫓等とともに残され、昭和 19（1944）年には旧国宝（現在の重要文化財）に指定されることが内定していました。ところが翌 20 年の高松空襲によって被災し、焼失してしまいました。現在も石垣には門の焼失に伴う赤い変色が残されています。

『高松城下図屏風』に描かれた桜御門
（香川県立ミュージアム蔵に加筆）

建物が焼失したあとの桜御門石垣（復元整備前）

赤く変色した石材。ひびや割れも多い

復元した桜御門のプロフィール

構造形式：脇戸付櫓門、入母屋造、本瓦葺

規模：〈下層門〉桁行正面二間、背面一間　梁間三間、〈上層櫓〉桁行六間（11.780m）梁間二間半（4.908m）

仕上：〈屋根〉本瓦葺〈外壁〉大壁　漆喰塗　腰壁　下見板張

建築工事費：295,379 千円　　建築工事実施設計・工事監理費　33,550 千円

桜御門の復元

復元に至るみちのり

史跡で歴史的建造物を再現するには、入念な調査研究が不可欠です。可能な限りの資料を収集し、その分析・研究を積み上げて復元の根拠を整理します。

桜御門には、詳細な指図（設計図）や調査図面、模型等は残されていませんでした。今回の復元に当たって参照した資料は主に①古写真、②現地に残る痕跡、③発掘調査成果、④聞き取り調査と類例調査成果に区分できます。

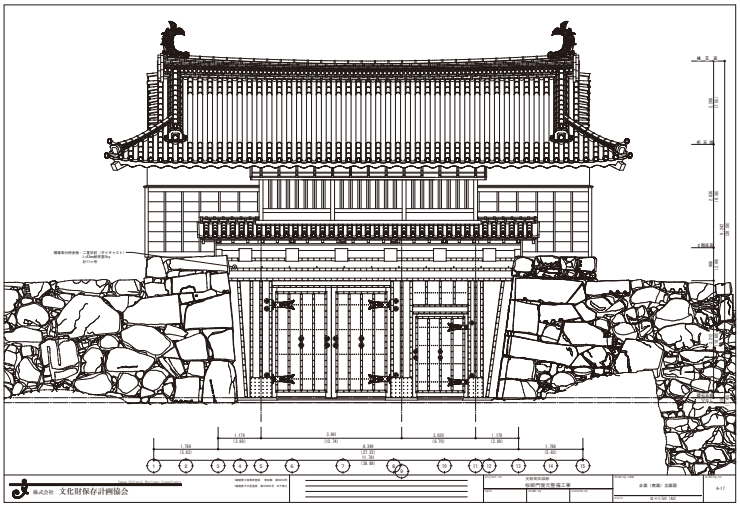
これらの資料を根拠に、現存する石垣や礎石といった史跡の本質的価値の構成要素を損なうことのないように留意して設計を進めました。また、現代における歴史公園内の新築建物としての観点から、耐震・防火等の安全性能の確保にも努めました。

こうして、有識者で構成された史跡高松城跡整備会議の助言を受けつつ復元設計案を作成して文化庁と協議を進め、何度かの修正を経て復元の許可を得ることができたため、復元整備工事に着手しました。

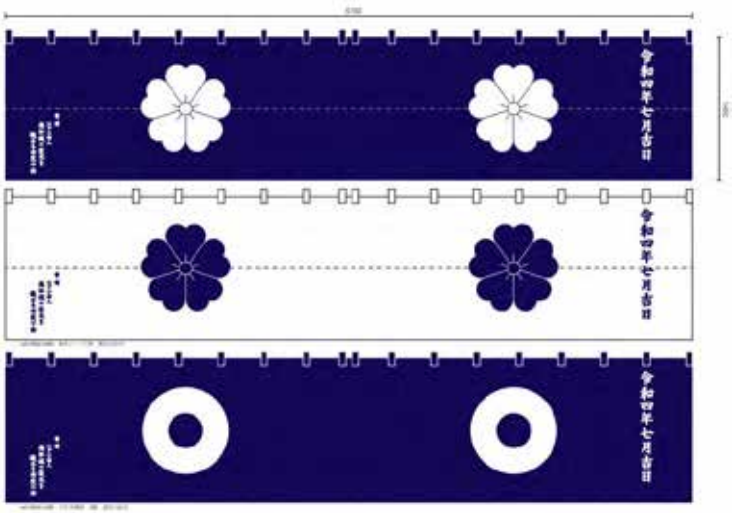
工事は令和元（2019）年度から開始し、令和4（2022）年6月に完成しました。発掘調査の開始から門の完成まで、足掛け12年を要した事業でした。

桜御門復元整備の工程

区分	項目	細目	内容	H23年度 2011年度	H24年度 2012年度	H25年度 2013年度	H26年度 2014年度	H27年度 2015年度	H28年度 2016年度	H29年度 2017年度	H30年度 2018年度	R元年度 2019年度	R2年度 2020年度	R3年度 2021年度	R4年度 2022年度
発掘	発掘調査														
設計監理	安定性調査	地盤調査・石垣強度調査													
	基本設計	復元計画・復元図作成													
	実施設計	石垣解体修理設計													
		門復元設計													
	施工監理	石垣解体修理													
		門復元													
復元工事	石垣修理工事	解体													
		積直し													
		測量調査	石垣平面・立面・断面												
	門復元工事		復元・防災・修景整備												
その他	委員会等協議		委員会・協議・視察等												
	許認可等		建築基準法適用除外												
			史跡・名勝の現状変更												
	整備報告書	石垣整備報告書													
		建造物整備報告書													



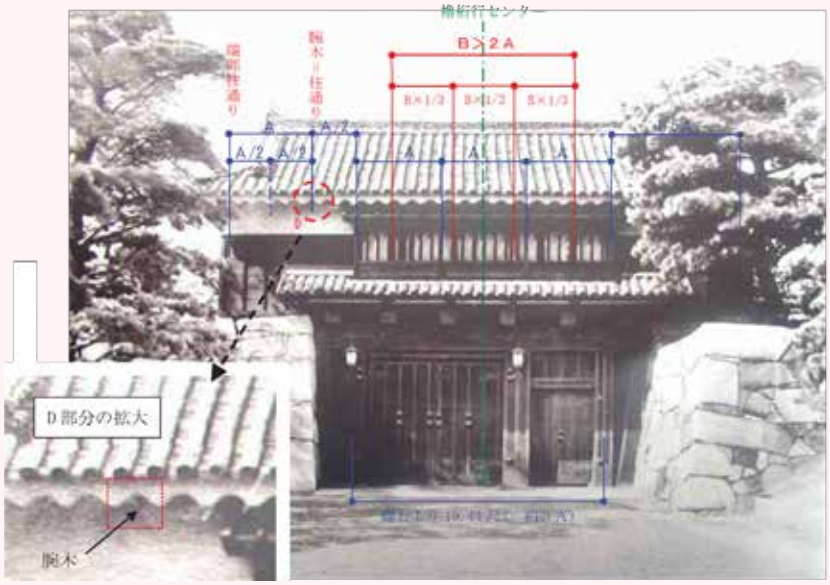
桜御門復元整備工事設計図の一部



製作した３種類の幔幕

復元のための調査

古写真の収集と分析



桜御門古写真（左上：奈良文化財研究所提供 左下：高松市歴史資料館蔵）とその解析

桜御門は昭和 20 年まで残っていたことで、城内の建造物の中でも比較的多くの古写真が残されていました。特に戦前に撮影されたと考えられる非常に鮮明なガラス乾板の写真（左上）が発見されたことで、外観の詳細なデザインや、細部のサイズを読み解くことができました。古写真は収集した復元根拠の中で最も有力な資料となりました。

現地に残る痕跡

現地には焼失前の桜御門の痕跡が多く残されています。礎石には柱の根巻金物のサビが付着しており、柱の寸法がかなり正確に分かります。石垣の上には焼失した建物土台に沿って石が変色した痕跡も見られました。

礎石に残る柱の痕跡

A 部拡大図

火災による被熱の痕跡

発掘調査

櫓門が載っていた石垣について、解体修理に伴い発掘調査を行いました。門が焼失した際に発生した大量の火災ゴミの層を確認したことで、焼失直前の門に使われていた瓦・漆喰等の部材に関する情報が得られました。これらは歴史資料であるとともに、復元工事の根拠資料にもなりました。

また、石垣解体に伴う調査からは、桜御門が江戸時代に複数回の改修を受けていることが明らかになりました。今回復元した門の姿は、築城当初から変わらず残っていたものではなく、何度か建て替えられた桜御門の最終形態だということになります。

発掘調査の様子

聞取調査・類例調査

門は昭和 20 年まで存在したため、焼失前の門の内部に出入した経験のある方から聞き取り調査をすることができました。この際に、二階部分の床は板張りであったこと、入口付近に階段が設けられていたこと等が分かりました。

現地に残る資料だけでは分からない点については、主に水手御門（みずてごもん）や旭門（あさひもん）など、城内に残る他の建造物を参考にしました。鯱瓦の形や漆喰の塗り方、木材表面の加工方法などは城内の類例を参考に決定しています。また、使用木材の種類を決める際には高松城以外の城郭に残る櫓門の類例も調査しました。

出土した瓦（上）と工事で製作した瓦（下）

類例①　月見櫓・水手御門・渡櫓

月見櫓の木材加工方法調査

鯱のデザイン原画

類例②　旭門

復元整備

石垣修理

経年劣化と戦災により傷みの大きかった石垣について、解体して傷みの要因を調査し、対策を講じたうえで積直しを行いました。桜御門石垣の傷みの最大の要因は、やはり空襲による被熱と考えられます。

桜御門西側石垣の解体状況

石材再利用率の向上

門の復元を見据えると、土台となる石垣は堅牢に修理する必要があります。一方で、空襲で被災した石垣は石材の表面に劣化が認められました。石垣の安定性を優先すると、新しい石材に交換するのも有効ですが、オリジナルの石垣の持つ文化財的情報は失われてしまいます。文化財の保全と石垣の安定性を両立するために、石材の各種強度調査を行った上で最小限の補強を行い、さらに仮の積直しを行った上で建物荷重を想定した載荷試験で安定性を検証しました。

石垣の仮積みと載荷試験

ボルトで繋いだ石材（右上）と鎹で補強した石材（右下）

建築復元

材料調達

江戸時代と現代では、入手できる材料の状況も大きく異なります。今回の工事では大径材は欅（けやき）と松を使用しましたが、いずれも城郭で使用できる程の大型で良質の材料は県内では調達できず、国内の各所から集めて使用しました。欅は中部地方の各所、松は岩手県産です。

この他にも金物・瓦・漆喰（しっくい）等も今回の工事のために全て新規に作成しました。

加工前の木材

金物の製作

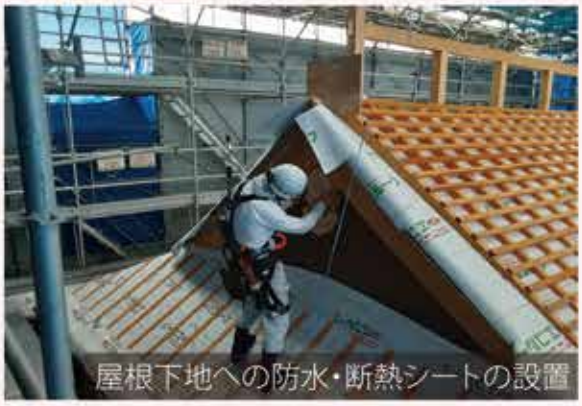
瓦の製作

漆喰の製作

現場施工

クレーンによる柱の吊り下げ

仮設足場と安全帯による屋根施工


屋根下地への防水・断熱シートの設置

江戸時代と現代では、用いることのできる機材も大きく異なります。伝統的な手仕事でしか解決できない技術的課題は職人の技能で解決しつつ、クレーンや電動工具など現代の機材も活用して工事は進められます。また、耐震・耐火対策など、災害対策や耐久性の向上のために意図的に現代の材料も併用しています。

復元工事を可能にした職人の技

復元工事には伝統的な技能に習熟した多くの技能者が従事しました。伝統的な工法についての知識や経験を基に、与えられた条件の中で工事を実現する確かな手仕事が、桜御門の復元を可能にしたのです。また、歴史的建造物の復元は、こうした技能の習熟の場であるとともに、世代を超えて技を継承する伝習の場としても機能しています。

復元の抱えるジレンマ

復元で城郭のかつての姿が視覚的に理解しやすくなった一方で、工事終盤に桜御門に関する新たな史料が発見され、欅で製作した鏡柱が実は近代に柱の老朽化に伴って欅板を張り付けたものであったことが判明しました。復元は計画時点での最大限の根拠の積み重ねで実施する行為ですが、新史料の発見や研究の進展によって修正すべき情報が事後的に得られることも珍しいことではありません。ただ、一度復元した建物の細部を修正することは物理的に困難なことも多く、復元と研究の進展はこうしたジレンマを抱えながら進めることになります。

技能者の手仕事（上から瓦葺き、漆喰塗り、木材加工）

高松城のこれから

桜御門は史跡高松城跡における最初の歴史的建造物の復元整備事業でした。文化財の活用を目的に、復元根拠の収集と調査研究、伝統的な技能と現代の工法の融合によって再現された桜御門の存在は、文化財に対する現代の我々の価値観を端的に表しています。確実な保存と着実な研究に基いて活用を充実させ、史跡高松城跡の価値をより明確に発信することで文化財を未来に継承する原動力になるはずです。取組はこれからも続きます。

創造都市 高松
CREATIVE CITY TAKAMATSU

桜御門復元

令和４（2022）年7月
編集・発行 高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課
高松市番町一丁目8番15号　tel 087-839-2660
本書は高松玉藻ライオンズクラブの寄付を受けて刊行した